

## 僅か1か月の対応で授業復帰する

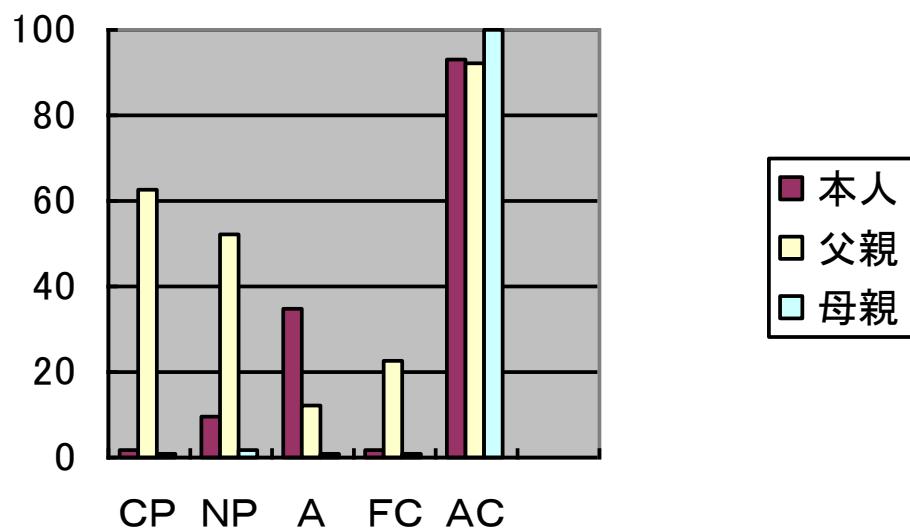
きちんと対応すればこうした子ども達もいるという例である。

相談は2月21日に入った。本人と母親が来た。

当時彼は中学1年生であった。前年の9月から不登校になっているという。それでも9月は4日、10月は5日、11月は7日、12月は6日、1月は4日、2月はこれまで3日出席していた。授業に出来るようになりたいと言う本人の希望に応え、完全な不登校でないから、授業復帰は難しくないと判断した。当時49歳の会社員の父親に、47歳のパートの母親、21歳と16歳の姉がいる。

本人は、その原因をなかなか言わなかった。母親もそれが分からず困っていた。幸い彼の友達が私の教え子の子どもであったことから、その日の夜聞くに、部活のサッカーでキーパーをやらされ、みんなでシュートしボコボコにされたことがきっかけではないかと、証言してくれた。

親子の心理テストを探った。以下のエゴグラムだった。



非常に自己肯定感が低い親子である。子どもの不登校で、すっかり子育てに自信を失くしてしまっている親像が伺われるが、幸い父親にしっかりした父性（不登校解消の水先案内人）と、中程度ではあるが母性（疲れた身の癒し役）が備わっている。父親が彼を不登校解消に導いていけると判断した。

二人の姉に囲まれ優しい彼は、協調性を最も重んじ、けんかなどもってのほか、万一他人と対立しても、自分自身を責め、後悔と反省の気持ちで一杯になってしまう。何か失敗した時にも、「あの時、ああ言っておけばよかった」「勇気を出してやってみればよかった」、と一人でウジウジ悩む傾向がある。従って、キーパーをやらされボコボコにされ、明らかに

いじめであっても、あの大河内清輝君（仲間のいじめで自分を責め 14 歳で自殺）のようにその友達を庇い、自分を責め、その事実を誰にも言わない。周りの目が異常に気になり、授業にも出れない状態であると分析した。本稿の趣旨より、両親の心理分析は割愛する。

普通に授業に出たいという本人の希望からご両親の同意の元、早速対応に入った。出席認定を受けながら平日午前 3 時間の学習指導と、父性と感性を成長させる週 3 回のカウンセリング、毎週土曜日の両親のペアレントトレーニングを開始した。

同時に、いじめを証言した教え子の子どもとサッカー部の顧問にも協力頂き、彼をボコボコにした生徒達との面談を行い（勿論、彼らの保護者の同意の元）、いじめは人権侵害である旨をきちんと話させて頂いた。

ご両親には、1 カ月アドラー心理学を学んで頂きながら、父親、母親のそれぞれ役割・行動を身に付けて頂いた。

1 カ月余の新学期 4 月からの普通登校を果たすため、春休みの 2 泊 3 日の長野での交流合宿参加もあり、彼にはタイトなスケジュールだった。春休みがあったため、当グループの予備校（東進中学 NET）の助けもあって、勉強の追い付きも果たせた。

結果、彼と両親の努力もあって、彼の望み通り、新学期初日から普通に登校し始めた。